

演じ続ける老女



mikatuki98

戻れない場所。

そこは嫁いで来た日から、あらゆる感情のはけ口でもあった。

本当に好きかどうか分からない夫と二人だけの日々。

やがて天から天使が降って来て家族が増えた。

最初に女だったから、落胆した夫が彼女を責めた。

色々な感情が彼女の中で渦巻く。

その夫が他界した時、彼女は不思議と涙は出なかった。

女の子が側にずっと居てくれると思ったから？

いや、そう思い込むことにしたのだろう。

『本当は誰でも良かった』

彼女は心の奥底でそう呟きながら、結局、側にはずっと居てくれはしなかった女の子の顔を想い出しながら時々大声を出す。

「誰か来て～～～ 助けて～～～」

病院の深夜、廊下中に彼女の声が不気味に響く。

昼間は食事の途中で不意に悲しみが襲って来て嗚咽してしまう。

廻りの誰かが彼女に視線を送る。

その視線を確かに感じながら、彼女は涙を流すことを止めない。

『こうしていれば誰かが構ってくれる筈……』

演技？

そうかもしれない。

きっと彼女は喜怒哀楽の記憶を忘れないように、突然何かを思い出したように、記憶の欠片を繰り返すのだろう。

女の子が来た日、彼女は無言で車椅子に座っていた。

まるでゼンマイの切れたお人形のように無表情で大人しく座っていた。

女の子はすっかり大人になって、彼女にそっくりな顔立ちになっていた。

今日彼女は目に見えない、いや、彼女だけに見える誰かを相手に、延々と喋り続けている。

もう何時間も何時間も何時間も……理路整然と。

ただ声だけは枯れずに出続ける……不思議と。 了